
ソール 幸福 ギルド目録

深山 姫鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソール 幸福 ギルド目録

【Nコード】

N1915T

【作者名】

深山 姫鈴

【あらすじ】

グノール王国内有数の、商業の町リーリア。遠方からの依頼を終え、久々にギルドへ戻ってきたジルエード。その報告をしにギルド長の執務室に向かった先には、精霊族の少女がいた。成り行きで彼女を引き取ることになったが、それからの日々が刻々と変わっていく。

様々な種族が交差する探偵風異世界ファンタジー、ここに始動！

1 - 1 (前書き)

はじめに、これから本作品を読んでくださる皆様に御礼を申し上げます。

こちらのサイトでは、初の投稿となります。

皆様が満足する表現ができていないところも多々あるかと思いますが、精一杯努力していきますので、どうぞよろしくお願いします。あまり長々しく書くのもあれなので、第一章での挨拶はこれにて終了させて頂きます。

最後に、皆様へお願いです。

これから本作品を読み進めていく中で、何か気がついたことがあれば気軽に意見をを送りください。

それでは、本編が始まります。読者の皆様、どうぞお楽しみください。

純白の雪が降る日。暦は、^{ザンキ}雨月 から ^{ユキ}雪月 へと変わった。外は夜の闇が支配する時間。そんな時でも、この町 リーリアは人々の活気で溢れていた。

全く。町の広さは王都の半分だというのに、これで国内第二位の経済力と産業力を持っているのだから驚きだ。ちなみに、リーリアは大陸北西部に位置するグノール国に属している。その中心地にある王都から東に十数キロの位置にあるのがここだ。

この時間帯でも、獣の姿をした種族 つまり獣人族^{ビージャン}や、人と同じ姿を持ちながらその数倍寿命があるとして有名なエルフの姿も見える。

他にも、主人や屋敷の守護を目的とする精霊^{ソール}もいるそうだけど、この種族に関しては希少種といってもいいほどだ。国内でも確認されているのは、俺の知る限り二人しかない。その両方が、うちの職場にいるのだが……。

普通なら探すことはおろか、お目にかかることさえできない。それができるとすれば、よほど運がいい奴か精霊狩りを生業とする悪業者のどちらかくらいしかない。職業上、俺やそこで働く者たちは例外だが、それ以外の人となるとそうはいかないらしい。

そんな故郷たるこの町へ、久方ぶりに足を踏み入れた俺ことジルエード・ヒルビアンカは、時折吹く冷たい風に大きく体を震わせた。

服装は、厚手の黒い長袖シャツと同色のズボン、その上に灰色のマントを羽織るといって格好だ。しかし、これでは、寒さをしのぐにはきついかもしれない。いや、正直に言うと足元から這い上がる寒気には勝てない。

そのため、さきほどから体を微妙に震わせているのだ。

「……はあ。月が変わった途端これじゃ、先が思いやられるわ」

と、俺は旅行鞆を片手に愚痴る。

暑いのも寒いのも苦手な俺にとって、夏と今のこの季節はあまり好みじゃない。

しかもこの雪のお陰で、途中から徒歩でここまで帰る羽目になってしまった。原因は、いたって簡単。途中まで乗っていた辻馬車の従者に、雪の影響でこれ以上はいけないから、と言って半ば無理やりに降ろされたからである。

全く、今日はツイてない。

そう思いながらも俺は、片手の旅行鞆を持ちなおして、メーア 幸福

ギルドのある町の中心部へと向かう。やや長く白雪に近い銀灰色の髪が、それに合わせて上下に軽く揺れ動く。

……そう。俺の職業は『幸福』と名のついた民間ギルドのメンバー。国内には、各町や村毎に民間ギルド（大きさも組織も異なるが）が必ず一つある。中でも俺の所属する所は、公には出来ない事件の解決や警護（依頼主によって異なるが）などを主とする班である。

自身の仕事場へ向かう途中、仕事を終えて家に帰る人や仲間内と一緒に近くの飲食店へ入る人。そんな彼らとすれ違いながら、俺は数年前に引き取った子供の身を案じる。

俺がいない間に体調を崩していないか。戸締りはしっかりしているのか。そう考えるだけで自然と歩く足が速まった。

慣れ親しんだ町を五分も歩けば、目的の建物が見えてきた。その内、いくつかの窓（特に、三階の方だが）から明かりが点いている。この様子だと、まだ自分たちの仕事をしているメンバーもいると予想が出来る。

相変わらず大変だな。

そう思った時、背後から誰かの足音と共に、嬉しそうな声が聞こえてきた。

「……ジル？ ジルエードじゃないか！ 久しぶりだな！」

その響きに懐かしさを覚えつつ、俺はその方へ視線を向ける。と、そこには二十代前半の若い男性がいた。さらに、その彼はやたらと

嬉しそうな顔をしていた。

彼の名前は、アルフォード・ダカート。歳は俺と同じ二十三で人
族でもある。みんなからは、アルという愛称で親しまれている。こ
いつとは十年前に同期で入ったメンバーの一人で、今もこうして友
好関係が続いている。

そんな彼も俺と似たような仕事に駆り出されていたのか、厚手の
コートにマフラーをつけ、片手には旅行鞆がある。

「なんだ。お前も、遠方の仕事だったのか？」

互いに拳闘士を軽くぶつけあったあと、俺は早速と言わんばかり
に尋ねてみる。

服装からして大方、俺と同じような仕事を割り振られたのかと察
する中、アルは肩をすくめて答える。

「まあ、そんな所。……募る話は後にして、それより、早く中に入
らない？ こんな所で話のも寒いだけだし。それに、レイスンに報
告しなきゃいけないだろ？ お互いに」

よければその後、近くで一杯飲まない？ とアルは誘いつつ、目
の前にある扉を開けて中に入った。

「ああ」

と、彼の言葉に拒否することもなかった俺は相槌を打ち彼のあと
に続いた。

久しぶりにギルド内に足を踏み入れた途端、交友関係のあるメン
バーたちが集まり、次々に声を掛けてきた。

その中で一つ話にあがったのが、最近新しいメンバーが入ったと
いうものだが。彼ら曰く、その子を連れてきたのが先代のギルド長
らしく、しかもかなり美人だという。

ここ数日は、メンバー 特に、男性 の間で話で持ちきりで
ある。

何を寝ぼけたことを言っているだ、などとに訝しく思いつつも、俺はアルと四階にある執務室に到着した。

扉の前で一息吐いた俺はその前で片手を上げ、三回ほどノックをする。そこで少し待ってみるものの返事が無く、静けさだけが返答とばかりにあるだけだ。

「……ん？ 誰もいないのか？」

この状況に不信感を覚えた俺は、眉間にしわを寄せつつもそんなことを言う。

「そんなはずはないよ。今はまだ、勤務中のはずだし」

依頼主の相談に乗っているんじゃない？ とその疑問に答えたのは、俺の後ろに控えていたアルだった。

「それじゃあ、仕方がない。あいつが戻って来るまで、部屋で待つておくか」

その類であれば仕方ないなと思いつつ、俺は気だるそうに頭を掻きながら執務室の扉を開ける。その先にいる存在に気づかず。だから、扉の前に人がいることを認識した時には、驚きのあまり呼吸を止めてしまったのである。

目の前には、背中を覆い隠すほどの銀髪に黒い瞳をした少女が立っていた。

白磁の肌に顔立ちも整っており、身長は俺より拳一つ分くらい低い。たぶん、身長は女性の中では比較的高い方に入るだろう。服装は黒に近い紫を主としたドレス風な物で、腕の裾や胸元には純白のフリルがついている。

遠方に行くまで、俺は彼女を見たことがなかった。もしかしなくとも、さきほど一階で言っていた先代が連れてきたというメンバーかもしれない。

「……お前、な。いるならいるで、返事して扉を開けるくらいしろよ」

止めていた呼吸を再開させた俺は、半ば呆れつつ目の前にいる噂の美少女に話し掛ける。と、彼女は泣きそうかつ怯えた表情で俺を見上げた。しかも、目尻には涙を溜めて。今にも、大声で泣き出しそうさ。

「ちょ、お前、なんで」

ここで泣くんだよ、と続けたかったが、俺は続いて出かかった言葉が無理やり飲みこむ。今ここで質問を投げかけても、余計に状況が酷くなる気がしたからである。

こういう場合は、下手に声を掛けるのはあまり良くない。それをしてしまうと、余計に泣かせてしまうことがあるからだ。

五年くらい前にも、これと同じ状況を俺は体験している。その経験から行くと、泣きやまない確率の方が高い。

それを即座に思い出した上で、俺は俯いて涙を流す彼女の頭に優しく片手を置く。途端に、彼女の体がビクツと震え強張った。

どうやら叩かれると思っただけらしい。その証拠に、嗚咽混じりの声が小さく聞こえてくる。

俺はそれを気に留めず、手を乗せた頭をゆっくり撫でてやる。優しい手つきで、何度も何度も。そうしていると、彼女は少しずつ握りしめていたスカートから手を離し、俺の方へ持ってくる。

それに対して俺は抵抗することなく、彼女の行う動作を受け入れてやる。やがて彼女の腕が首元へ回され、さらには体を引っ付けて俺の首元に顔を埋めた。

そこで俺は空いた方の手を、彼女の腰辺りに添えてやる。すると、彼女は堰を切ったように声を上げて泣き始めた。

それを確認した俺は腰に当てた手で彼女をさらに引き寄せ、より一層優しさを込めて頭を撫でてやる。長い間、離れ離れに暮らしていた親子が再開した時のように。

ちらつとアルの様子を伺うと、彼は少し離れた所で所在なさげにしていた。が、その視線は、明後日の方向へ向けられている。その行為は俺たちに対する彼なりの配慮のようにも思えた。

執務室にいた美少女に、気が済むまで泣かせていた中。ギルド長が奥にある専用の仮眠室から出てきた。俺と彼女に気を使ってか、扉を開ける音や足音などを立てぬようにしてくれていた。

やがて彼女は泣き止み、時折、鼻をぐずらせてはいたが、少しずつ落ち着きを取り戻していた。それを見計らってか、ギルド長は無邪気な笑みを浮かべて声をかけてきた。

「五年前からの経験が役にたったね。ずいぶん様になっているじゃないか」

ちなみに五年前の経験とは、ちょうどその時期に両親を亡くした獣人族の子供を引き取ったことである。その子供も両親と同じ幸福^{フォーチュン}ギルドのメンバーで、その子供は今、食堂の給仕係をしている。「やかましいっ。半ば強制的に、お前が押し付けてきたんだろうが」やっと泣きやんだ彼女の頭を撫でつつも、俺は面白そうなものを見るような顔つきで話すギルド長に言い返す。

彼の名は、レイスン・フロワード。この幸福ギルドの長である。そんなレイスンの種族はエルフ。年齢は今年で六十を迎えるそうだが、老化の衰えが全く現れていない。外見だけで判断するならば二十代中盤そこそこの年齢にしか見えない。

その上、こうして何かあるとすぐにちよっかいをだしたり、仕事はそっちのけ町に出かけたりする難癖がある。執務室から抜け出した際には秘書のエリーが彼を捜し、執務室に引きずり戻している。

それを毎回目の当たりにしている俺は、何度も彼に「いい加減に止めたらどうだ？」と忠告はしているのだが、この様子だと本人は直す気がないらしい。

「まあ、その時の話は置いて。その子、もう君に懐いているよっだよ」

と言われ、俺はさっきまで泣いていた彼女に視線を向ける。

そこには、上目遣いに見上げる少女の姿があった。俺と視線があった彼女は恥ずかしそうに頬を朱に染め、首元に顔を埋めてしまう。その様子が苦笑しつつも、また彼女の頭を撫でてやれば控えめに嬉しそうな声が漏れた。

と、そこで無言を決め込んでいたアルが突然口を開いた。いつ移動したのかは不明だが、彼はレイスンの隣にいた。

「……ねえ、長。彼女、いつからここに？ 僕とジルが遠方に行くまで、居なかつたはずだよな？」

「それに、この子の種族も気になる」

何気なしに投げかけたアルの言葉に便乗して俺もギルド長に問うと、レイスは「今、それを説明しようと思っていたんだ」と言う。

「彼女の種族は精霊^{ソウル}だよ。先代　つまりわたしの父から、ここで預けるように言われたんだ。それが、三日前のことだ」

ここで言葉を切り、レイスは俺たちの様子を伺う。

俺は別段驚きはしなかったが、アルの方は軽く目を見開いていた。「それで、この子を見つけた場所は？」

「国内南部にあるスラム街さ。どうもその子は、孤児だったようですね。それに、その子を見つけた時は体調が思わしくなかったらしい。そのため、一週間程だけ療養させてから、こちらに連れきたそうなんだ。それに、今も引き取り手がいなくて困っているんだ」

「じゃあ、これから」

どうするのだよ、と言いかけた時、首に回された少女の腕に力が籠る。心なしか、小刻みに震えているように思えた。それは、何かを恐れている感じにも似ている。

「その子、他人に恐怖心を抱いているんだよ。……実はね、彼女のいたスラム街は国内でも、生活する上で差別が激しい所だね。その時他人に対する恐れが今でも強く残っている」

「だけど、その恐怖があるにも関わらず、こうして俺に身を預けている」

「ああ。そこが不思議なんだよ。人である君に特別な能力は無いのに」

軽く卑下する言い方に、俄かに苛立ちを覚えた俺はムツとして言い返す。

「他種族に対して偏見を持たない、っていうのがあるだろう。じゃなきゃ今頃、この子にこんなにも優しくはしないぞ？」

そう言つと、その言葉に反応した少女が埋めた首元から顔を上げ、驚いたように俺を見上げる。

「もし、本当にそうだったら、もう悪い方面に行動しているさ」

彼女と目を合わせた俺は、彼女の頭上にある手を後頭部に回し、さらに腰にあてた手も使つてギョツと抱きしめてやった。瞬間、恥ずかしげな声が彼女から聞こえたが、すぐに落ち着いた。

それを見て居心地の悪さを感じてきたのか、アルはレイスンに向かつて静かに口を開く。

「じゃあ、長。あとで報告書にして持つてあがります」

「ああ。そうしてくれ」

「了解しました。……じゃあ、ジル。また後で」

その言葉を残してアルは執務室から出て行つた。部屋に残されたのは、俺と精霊族の少女。それとギルド長であるレイスンだけになった。

「さて、改めて長旅ご苦労だったね。ジルエード。帰還早々で悪いけど、君に頼みたい事があるんだ」

執務用の椅子に腰かけたレイスンは、改まった表情を作つてそう告げる。彼がこういう顔をする場合、大半は面倒な仕事の依頼についてか、もしくは

「いや、言わなくていい。この子を引き取れ、だろ？」

彼の言いたい事に察しがついた俺は、少女の細い腰に両手を回して聞く。

「早い話がそれかな。……けれど、今度は養い親ではなくて、その子のマスターになって欲しいんだ。今後のギルドのためにもね。ジルエードは、精霊がマスターを持つ時の条件は知っているよね？」

「ああ、一応心得ている。精霊が主人を持ち、その人物と行動を共にする場合、精霊はその者から名前を与えてもらう。そして、名を貰い受けた精霊は、主人となった者を守護する力を得る、か。だけど、それには両者の合意がいるだろ？」

と、俺は目を瞑り覚えている事を一通り述べ、ギルド長の様子を伺う。そこには、満面の笑みがあった。まさか、と思つたのも束の間。俺が抱きしめていた少女が僅かに動き、頬に口づけをされる。

柔らかく、艶めかしい感じがした。

いきなりの事に呆気にとられた俺は思考が停止し、眼下にいる彼女を見つめたまま動きを止める。その時のレイスンときたら、口と腹を抱えながら必死に笑いを堪えていた。

今この場に彼女がいなければ、きっと彼の顔面に拳をめり込ませていたと思う。絶対に。

想定外の行動から立ち直った俺は、レイスンに突き刺すほどの鋭い目つきをくれてやる。

「……す、すまん。君が、そんなに驚くとは思わなかったから、ついで」

レイスンは目尻に涙を溜めて、片手を上げて謝った。心なしか、まだ笑いを堪えているように見える。

「ギルド長。そんなに笑いが堪えられないならば、エリーを呼んできて差し上げます。彼女の力なら、確実にあなたの死と共に笑いを抑えてくれますが」

彼の様子に少しプチツときた俺は、口調を丁寧な言葉遣いに変えて脅しを掛ける。

それはかなり効いたようで、エリーの名前を聞いた途端、顔を引きつらせた。しかも、椅子に座った状態のまま数歩後ずさった。

「わ、悪い。次から、君に対する言葉には気をつけるよ」

夏でもないのに、たらあつと頬に汗を流しつつも、レイスンは精一杯の笑みを浮かべ謝ってくる。

正直に言っと、顔がうまい具合に引きつっていて笑えた。

「約束ですよ？」

そう念を押した後、彼が頷くのを見てから俺は心に芽生えた苛立ちを落ち着けた。

全く。これだから、レイスンとの会話は面倒なんだ。

と内心で愚痴りながらも俺は、いつも通りの口調にして口を開ける。

「それで話を元に戻すが、この子のマスターは俺でいいんだな？」

一応確認のためという事でレイスンに聞き、精霊の少女に視線を

向ける。俺と視線があった彼女は、コクリと小さく頷いてくれた。

「……あ、ああ。もうその子は、君を主人にすると決めているようだしね」

その後は遠方の依頼報告を済ませた俺は、精霊の少女を伴って彼の部屋を出た。

相も変わらずこの階は静けさと薄暗さに満ち、どこか寂しさを感じさせる。

「さてと。これからどうするかね」

急ぎの依頼でもない限り、今日の仕事はこれで終わりだ。そのため就寝の時間までは、ある程度の自由がある。その前に、色々な言いけない事はあるが。

その一つとして

「まずは、お前の名前でも」

決めるか、と続ける前に隣で空腹を訴える音が聞こえた。その方へ視線を向けると、恥ずかしそうに顔を伏せる少女の姿があった。

その頬は赤く染まっていた。

「悪い。先に、飯でも食うか？」

そう聞くと、彼女は上目遣いに俺を見てコクンと頷く。次いで、俺の腕に手と腕を絡ませる。まるで抱きつくような形である。

腕に当たった胸の柔らかい感触に、俺は頬を僅かに朱に染める。

「それじゃ、行こうか」

もう一度、彼女は頷くと、歩き始めた俺に合わせて歩みを進めた。

一階の最奥にある食堂に着いた俺たちは、幸いにも入口近くに空席を見つけた。

「ここに座りな」

俺は、未だ腕にしがみつくような形で歩いてきた少女に向かって

声を掛ける。

最初はそれを拒まれるかと思ったが、彼女は素直に言うことを聞き、目の前にある席の一つに腰を落ち着ける。さっきまで引っ付いていた方の手を握ったまま。

その様子に苦笑しつつも、俺は辺りを見渡して養い子の姿を探すが、この時間帯でも仕事終わりのメンバーたちの姿があった。

みんな数人の仲間と固まり、楽しそうに会話をしていた。今のところ、俺達が来た事には誰も気が付いていないらしい。

にもかかわらず、一人だけ俺に駆け寄り寄る獣人族ビージャンの少女を見つけた。その姿に、懐かしさと会えた嬉しさが溢れだした。

「お義父とくさん！」

獣人族である彼女は俺のことをそう呼び、胸元へ飛び込んできた。「二ナ！」

少しの間だけ精霊の少女に手を離してもらい、俺は胸に飛び込んできた彼女を抱き止める。

「お義父さん、おかえりなさい！」

ギユウツと俺を抱きしめた二ナは、青空を思わせるような澄んだ瞳で見上げて言う。

「ただいま、二ナ。俺がいない間に、体調とか崩さなかったか？」

「うん、私は平気よ。お義父さんこそ、怪我とかしなかった？」

「ああ。見ての通り、怪我一つなしだ」

俺は屈託のない笑顔で言い、二ナの頭を撫でる。

途端に、二ナは嬉しそうに笑顔をはじめさせる。

「良かった。……あ。それなので、お義父さん。こちらの方は？」

そう言われ、二ナが顔を向けた先に視線を向けると、こちらを見上げる精霊の少女がいた。

久しぶりに会った養い子との会話に夢中になり、彼女の存在をすっかり忘れていた。

「ああ、こいつは」

彼女について話そうとした時、彼女から空腹を訴える音が聞こえ

てくる。その音に、彼女はまた恥ずかしそうに頬を赤くして顔を俯かせる。

「二ナ。悪いけど、この話は部屋に戻ってからな」

そう提案すると、二ナはコクリと頷いてくれた。

「うん、わかった。……あ、夕食は彼女の分も一緒にいいよね？」
やっと俺から体を離れた二ナは、頭一つ分くらい高い俺を見上げて、そう問いかけてくる。それに「ああ」と俺が答えた後、笑顔で頷いた二ナは厨房の方へ駆けて行った。

彼女が厨房の方へ戻るのを見届けた後、遠慮しがちに俺の右手を両手で掴む精霊の少女に顔を向ける。と、小首を傾げて俺を見上げる彼女と目が合った。

彼女の瞳は、俺と二ナの関係を教えて欲しいと訴えかけていた。

「さっきのは、俺の養い子だ。名前は二ナって言って、生粋の獣人族なんだ。三ヶ月前に、十六になったんだ。見ての通り、白い猫の姿と明るくて元気が取り柄だな。これから、あいつとも一緒に生活する事になるから、お前も仲良くするといい」

彼女の頭を撫でてやりながらそう言ってやれば、コクンと彼女は素直に頷いた。そして、彼女は何を思ったのか体を少し脇に寄せ、握ったままの俺の手を軽く引っ張る。

「どうやら、立ちっぱなしの俺を気遣ってくれたらしい。」

「ありがとう」

俺はそうお礼を言い、彼女の隣に座った。途端に、彼女は遠慮しがちに俺の方に身を寄せた。直後、

「……………」

彼女は上目遣いに俺を見上げると、か細い声で声を掛けてきた。注意して聞いていないと、うっかり聞き落としそうになるくらいの声量だった。

今いる場所にいる大勢のメンバーが、もっと騒いでいたら確実に聞こえていなかっただろう。

「どうした？」

俺は隣にいる彼女に目をやると、首を傾げて問いかける。と、少しためらいがちに彼女は顔を伏せた。が、すぐに顔をあげ俺を見上げる。何か重要なことを決心したような面持ちで。

「……あなたの名前、教え……て？」

俺は耳を澄まして、静かなしゃべり方の彼女の言葉で思い出した。そういえば彼女と知り合ってから、まだ一度も自分の名前を言っていないかったらしい。

「ごめん、俺の自己紹介がまだだったな。俺は、ジル。ジルエード・ヒルビアンカ。見ての通り人族だ。改めてよろしく」

「……ジル、エード。いい、名前……」

「そうか？ 名前褒められたの、初めてだぞ？」

「……いい、名前。けど、わたし、名前……ない」

と言った直後、彼女の表情に翳りがさす。

どうしたのか、と問いかけるまでもない。

一週間と数日前まで暮らしていた、スラム街の暮らしを思い出したのである。その街での生活を経験していないが、そこでの辛さや厳しさというのは何となく理解できた。

それにしても、貧困で食にありつけるのも難しいのに、この美少女ともとれる容姿を維持できたのが不思議である。

「大丈夫だ。これからは、俺や二ナが傍にいる」

と言った後、俺は彼女の頭に手を置き、触り心地の良い銀の髪を梳くように撫でる。途端に、彼女は気持ちよさそうに目を細めた。

本当に、この娘は俺の前だと素直だな。

「……私の、名前……」

次いで彼女がボソツと言葉を発した。と同時に、俺の視界の隅に両手に夕食を持ってきた二ナが入る。

すぐに目の前の少女から片手を離して、二ナの方を見て片手を上げた。そこには、どこか嬉しげな表情があった。

食堂で少し遅い夕食を終え、二階の自室に戻った俺はベッドの脇に腰を落ち着けた。

さて、これからどうしたものか。

向かいにあるベッドには、精霊ソールの少女がちょこんと座っている。

仕事終わりの二ナは後ろから俺に抱きつき、しかもゴロゴロと喉を鳴らしている。頬ずり付きで。

一応、二ナに目の前の彼女について説明したら、快く承諾してくれた。

ついでだから一緒に名前を決めようと言うことになったのだが、この様子だと決まりそうにもない。

そう判断した俺は、頬ずりをする二ナから目の前にいる少女に視線を移した。

背中を覆い隠す絹糸のような銀髪に、夜の闇を思わせる程の黒瞳くまろ程良い膨らみを持つ胸元に、キュツと引き締まった細い腰。肌も比較的白い。それに服装は、黒に近い紫を主としたドレス風な物で、腕の裾や胸元には純白のフリルがついている。

などと、彼女の容姿を観察する中で、一つの単語が脳裏を過った。

「ライラ、か……」

そう呟きを洩らした途端、目の前の少女が心底嬉しそうに俺を見つめた。

どうした？ と俺が問いかける前に、今まで俺と頬ずりしていた二ナが言葉を発する。

「クスツ。お義父とっさんらしい」

「ん？ そうか？」

そんな自覚はあまりない俺は、種族違いの娘に聞き返す。

「うん。私、お義父さんに引き取られて、もう五年になるけど、何か大切な事を考えるときは、いつも結論めいた独白があるもん」

隣に座り直した二ナは、俺の右手を両手で握り、得意げに言う。まさに、私を褒めると言わんばかりに。

「特に意識したことないからなあ て、どうした？」

空いた左手で俺は自身の後頭部を撫でて述べる。直後に、自身に視線をおくってくる正面の少女に声をかける。俺に向ける視線がやたらと熱い。しかも、両手を胸元に当て、頬も朱に染めていた。

そういう風に見られると、逆に恥ずかしい。というかある意味、引くよ？

「ライラというお名前、とても素晴らしいです」

「こつ言つくらいだから、さぞかし本人も気に入ってくれたようである。」

ということ、精霊ソールたる彼女の名前は「ライラ」に決まった。

「……あ。ねえ、ライラ。一つ聞きたいんだけど、あなた、歳はい

くつなの？」

何を思ったのか、未だ俺にじゃれついたらままの二ナが何か思い出した声を上げる。次いで、ライラの方を見て不思議そうに問いかける。

ああ。確かにそれは俺も気になる。俺のような人族ならともかく、エルフや精霊といった種族の人は、かなりと言って言いほど長寿だから、外見が若くに見えても、実は五十半ばだったり百歳近い高齢だったりする場合がある。

そういった意味を込めて俺もライラに視線を向けると、コクリと頷いて彼女は口を開ける。

「……二十歳、です……」

彼女の年齢を聞き、俺達が驚いたのは言うまでもない。

俺達が眠りに就いてから、だいぶ時間が経った頃。ベッドの脇から人の気配がするのに気がついた。

危険の伴う仕事の上では、いつ何時起こるかわからない。そのため、常に周囲に神経を張り巡らせている。そして、すぐに物事を判断できるように脳内から眠気を取り除く。その感覚が、長期の仕事を終えた今でも自身の体にしっかりと残っていた。

それはともかく。今、傍にある誰か気配はその場から微動だにしない。眠っている俺に気をつかって息を殺している。しかも、俺に向ける視線には敵意がない。それはまるで、俺に訪れる災いから守る者のように。

と、ここまで来て俺はふと一つの疑問に思い至る。

俺の傍にいる気配は、ライラのものではないのか？

そう思い、俺は静かに瞼を開け、隣にいる人物へと目を向ける。

そこには、柔らかな笑みを浮かべるライラの姿があった。床に膝をついているのか、胸元から上の部分しか見えない。

「……申し訳ありません。起こすつもりはなかったのですが……」
と、至って静かな声でライラは言葉を発し、軽く頭を下げる。
どうやら、彼女なりの配慮だったらしい。

「いや、いい。気にしてないから」

半身を起した俺はそう言い、二ナが寝ているであろうベッドの方へ視線を向けた。

幸いにも彼女は、深い夢の世界へ入っているようで起きる気配はない。

娘の様子を見届けた後、俺はベッドから降り、箆笥の中にある非常用の毛布をそっと取り出す。そして、自身へと視線を向けるライラを手招きする。

「……あの。どちらに?」

すぐに俺の傍らに寄ってきた彼女は小声で言葉をかける。

「屋上」

そう一言だけ言い、後はライラの手を握って先導を切った。

彼女の手は柔らかく、とても触り心地が良かった。それを通して触れ合っていると実感するだけで、心から安心できるような感覚が溢れる。

その感じはライラも同じようで、どこか嬉しさを帯びた甘い吐息をもらったのがわかった。

スチール
鋼鉄製の扉を開けた俺はライラを伴って、寒気と夜の闇が支配する屋上へ出る。と同時に、帰還時よりも厳しい寒さに包み込まれた。さすがに夜中にもなると、寒さの度合いが違ってくる。

やっぱり、ここに連れてきたのは間違이었다かな……。

そう思いながらも、俺は寒気に体を震わせながら毛布を手に持ったまま辺りを見渡す。

屋上も例外なく雪の被害にあっており、三センチほどの量が積もっていた。しかもどのベンチも雪がかかっており、座ることが困難である。しかし、そのうち積雪の被害を免れたベンチが一つだけあった。

その背後には、メンバーの誰かが植えたであろう少し高めの木がある。

どうやらそれが、今回の積雪を防いでくれたことが見て取れた。

「ここに座ろう」

その前まで歩みを進めた俺は一度そこで立ち止り、後ろにいるはずのライラに声をかける。

が、その本人は入口付近で顔を上げ、頭上に広がる夜空を眺めていた。しかも、目をキラキラさせて。

それは、彼女が他人に見せる姿にしてはとても新鮮だった。

ああ。ライラもこんな表情が出来るんだ。

そう思い、俺は新たな発見だと言わんばかりに口元を緩めた時

「……くしゅんっ！」

と、ライラが静かにくしやみをした。直後、彼女は辺りをきよるきよると見渡しだした。そして俺の姿を見つけるなり、小走りで近づいてくる。そして、俺の胸元に飛び込んでくる。

「ライラ？」

彼女を受け止めた俺は不思議そうに名前を呼びつつ、抱きついてきたライラをそつと抱きしめ返す。

そうすることで、落ち着きを取り戻しつつある彼女が切実そうに言葉を発する。

「……マスター。私を、置いて行かないください」

と上目遣いに言ったあと、俺の首元に顔を埋めた。

ライラの体温が俺の方にも伝わり、安心する温かかさがあった。けど、それだけでは完全に寒さを凌ぐには厳しい。

「ごめんな、ライラ」

そんな彼女の行動に口元を緩めつつ、俺はライラの銀髪をさあつと一撫でする。と、たちまちライラは気持ちよさそうな声を漏らす。

「ありがとうございます。マスター」

耳元でライラにそう囁かれつつも、俺は手に持ったままの毛布を自身と彼女にそつとかけてやる。そして、彼女と共に後ろにあるベシに腰を下ろす。

ひんやりとした感覚が毛布と服越しに伝わってくる。それでも俺はライラと身を寄せ、その温もりを感じた。

「これで、ゆっくり話ができるね」

そつと彼女の頭に自分のそれを乗せた俺は、そんなことを口にする。

「……マスターとお話、ですか……」

「いやか？」

「いえ、そういうわけでは……ただ、こついう風なことをするの
も、体験するのも初めてなので、先ほどから胸がドキドキします」
今もすくどドキドキしています、とライラは言う。そして言葉と
は裏腹に、もっと俺に引ッ付こつと身を寄せてくる。

そんな彼女に少しだけ、口元を緩ませた。彼女は彼女で、俺に心
を寄せているのだ。それは、精霊の主人と言うことか、一人の人
物として見ているかは不明だが。

「なあ、ライラ」

「何でしょう？」

ふと声を掛けた俺に、ライラは上目遣いに返事をする。

「ここの暮らしはどうだ？」

「はい。エリーさんが優しく接してくれたので、なんとか」

そこで一度、言葉を切った後、

「ですが、今日、マスターと出会って、ほんの少しだけ、自分の見
る景色が変わりました」

「……ふつ。俺と会って景色が変わった、か」

確か、俺との暮らしに馴染み始めた二ナにも、同じことを言われ
た気がする。どこか懐かしさを覚える。

「はい。今までは時間の経過が遅く感じて、早く一日なんて終わっ
てしまえばいいのに、と思っていました。ですが、マスターと出会
ってからは、驚くほど時間が経つのが早いです。こんな気持ち、初
めです」

密着して答えるライラの口調は、ドキドキしていると言った割に
は落ち着いていた。

それを俺は、あえて聞かなかった。それをすれば、彼女との関係に
溝を作ることになる。その代わりに

「……二ナはどうだ？ 仲良くできそうか？」

と、自分の娘のことを聞いてみた。その途端、ライラの表情に申
し訳ないそれが溢れ出し、長い睫毛を伏せる。彼女の深い黒の瞳が
瞼に覆われる。

「申し訳ありません。まだ、よくわかりません」

素直な答えに、どこか安堵したような感覚が芽生えた。

大丈夫。二ナとの関係は、時間がなんとかしてくれるだろう。それこそ、ゆっくりとだけ。

「そうか。まだ、会ってからの時間が少なすぎたかな」

「ですが、きつと仲良くできると思います。二ナ様は、マスターに絶大な信頼を寄せています。それに、彼女からは、とても強い意志を感じます。いずれは私も、彼女のようにマスターを慕い、この命が尽きるまでマスターを守護したいです」

ライラの揺るがない口調と決意。それが、彼女が心に決めた大きな誓いだと思う。

まいったな、これは。

「そうまで言われると、俺もなかなか気が抜けないな」

彼女の固い意思に苦笑しつつも、俺は自分もライラに負けないくらしいの意思と力を持つと、と心に決めた。

2 - 1 (前書き)

大変、遅くなりましたが第七部更新です。
本ページより、第二章スタートです！
どうぞ、ご堪能ください。

「それじゃあ、お義父^{とく}さん。先にお仕事、行ってくるね」

眩しいくらいの朝日が、部屋の最奥にある窓から入る中。身支度を済ませた二ナが扉の前で振り返り、満面の笑みで声を掛けてきた。今日の彼女は、袖なしの黄色のワンピースに桃色の半袖仕立てのカーディガンを着ている。彼女は給仕係の他に、二ナもメンバーとしても活動を行っている。

その保護者たる俺としては避けて欲しい事柄だが、それが本人の意思であれば致し方ない。その、本人の意思を捻じ曲げてまで、自分の意思を通さねばならぬということでもないし。

まあ、配当された班も俺と同じであり、主に書類整理や飲み物の提供といったことをしているため、比較的に安心できる方面である。そういった意味では、レイスンには感謝しなくてはならない。

「行ってらっしゃい、二ナ。無茶はするなよ」

「お義父さんじゃないんだし、大丈夫だよ」

俺の言葉にクスツと笑い、笑顔を見せた二ナはそう告げて隣にいるライラに視線を向けた。

彼女と視線があったライラは、気まずそうな表情を浮かべ顔を俯かせた。俺はそれを視界の端で捉えつつも「ライラ、頑張れ！」と密かに応援する。

二ナは二ナで困った風な顔つきで、彼女を見ていた。

やがて、意を決したライラは顔を上げ、さあっと彼女に近寄る。

そして、両手で二ナの手を握り

「…………お気を、つけて…………」

緊張とやや躊躇いがちな声音で言う。

「うん、行ってくるね。ライラ」

ライラの慣れない挨拶にもかかわらず、二ナは柔らかな笑みを浮かべて言葉を返す。そして、彼女は俺たちに向かって手を振ってか

ら、三階にある仕事場へ向かった。

まあ、最初はこのくらいから馴染んでいく方がいいだろう。と思っていたら、目の前にいるライラがこちらに近づいた。そして、遠慮しがちに抱きついてきた。

「どうした？」

俺はそんな彼女を抱きしめ返して、柔らかな声音で聞いてみる。そうすることで、どういう変化があるわけでもないが。

「こうすると、なんだか落ち着きます」

そう彼女は答え、俺の首元に腕を回して顔を埋める。彼女の絹糸のような銀髪が頬にあたる。

少しくすぐたかった。

「……まあ、なんだ。朝食でも食いに行くか？」

「はい。よろしくお願いします」

抱きつくライラにそう提案すると、コクリと頷いた。

食堂で食事を終えたあと、俺はライラを連れて奥にある階段を上る。その途中で

「……あの、マスター。これから、どちらに？」

と、俺の腕に自身のそれを絡める彼女が静かに聞いてきた。

「ん？ ああ、うちの仕事場。ここの三階がそうなんだ」

「マスターは、どういったお仕事を？」

「まあ俺の場合は、事件が起きた時の現場検証とか聞き込みが多いな。他に同じ班のやつがいるが、それぞれ役割も違う」

そこまで言い、隣を歩くライラに目を向ける。が、まだ何か疑問が残っているのか難しい顔をしている。

「他に聞きたいことがあるか？」

彼女の姿を見ながら、すうっと目を細めて問いかけると、ライラは小さく頷いた。

「……はい。さきほど、マスターは同じ班と言っていました。ここ

には、どのような班があるのですか？」

「このギルドにある班は、全部で五つある。まず、第一班。これは、俺が所属する班だな。この班では、殺人事件に関する作業が多いな。内容は、さっき俺が言ったのと同じだ。第二班は、うちの班が集めてきた遺留品と現場にある指紋なんかの鑑定が仕事だ。」

次に第三班は、この町に住む人の手伝いだな。といっても、一人じゃ出来ないような引越しの準備とか部屋の大掃除なんかの力仕事が目だ。そして第四班は、書類の点検と確認とかの事務的仕事を中心だ。」

最後に第五班は、医療専門の班だな。どこか怪我をした時にでも寄るといい。ちゃんと傷の手当くらいしてくれるぞ。」

などと話している内に、目的の階へ辿り着いた。

やや薄暗い廊下と五つの扉、そして天井に備え付けられた電気が俺達を迎える。

もう業務開始時間なのか、廊下にいるのは俺とライラの二人だけだ。」

「で、ここがギルドの仕事場なんだが……たしか、部屋の配置は左手前から一班、二班、三班。右奥から第四班、五班っていう配置になってる。俺の第一班と第五班の扉さえ覚えておけば、特に問題はないはずだ。って、いきなりこれだけ言われてもわからないよな。ゆっくりでいいから理解してくれ。」

そう言えば、ライラはぺこりと頭を下げた

「ご説明、感謝します」

「ああ」

お礼の言葉を返したライラに短く返事をしたあと、自分の所属する班の扉の前に移動する。

「一体これはどういうことだ、ヴェルイーグ。んー？ 私の所有物をこんなにしやがって」

どうしてくれるんだ、こらっ、と第一班の部屋に足を踏み入れた途端、少し低めな女性の声が聞こえて来た。

この台詞を聞いた時、俺は「……あー、また面倒なことになったぞー。これは」と思った。

第一班に宛がわれた部屋の最奥　班長席がある方で、今問題となっている二人がいる。

そこには、一人の女性が小柄な男性の胸倉を片手で掴んで、締めあげている所だった。もう片方の手は腰に当てて。

彼を軽々と持ち上げているのは、この第一班の班長で、名を「エリーザ」と言い、レイスンの秘書をしているエリーの姉である。すらつとした長身に、深い赤髪をポニーテールにしたスタイルのいい女性だ。ちなみに彼女の種族は精霊^{ソール}である。一応、俺の知る限り（ライラを除いてだが）の二人目である。

で、そんな彼女の怒りを買った彼は「ロイ・ヴェルイーグ」と言い、小柄な体に、パーマがかかった髪を後ろで束ね、丸縁レンズのメガネをかけている。

臆病なことでも有名な彼は、目尻に涙を溜めながらエリーザに必死に謝罪している。もう、今にも泣き出しそうである。

そんな中、俺は部屋の中央に構えた机とテーブルに集まるメンバーの方に近づく。もちろん、その中にはメンバー分のコーヒーをお盆にのせた二ナがいた。

「……ロイのやつ、今度は何をやらかしたんだ？」

娘の肩に手を置いたあと、それぞれの席に着くメンバーを見渡し

ながら問いかけてみる。

彼らは一斉に俺の方に視線を向ける。と同時に、懐かしむような眼差しになったが、そのほとんどが苦笑いを浮かべるだけである。

この様子だと、俺がいない間にもこういう状況が多々あったことが思い知れた。

そんな中、一番左手前の机に腰を落ち着ける、黄色い毛並みを持つトラの獣人族ビージェンが代わりに口を開く。

「あいつ、班長が重宝してた花瓶を落としちゃったんだよ。あんたが出張中、これが十回くらいあったな」

お陰で班長のご機嫌を直すのが大変だったよ、と低音のきいた声音で彼は答えてくれた。

体躯がいいせいか、その声がすごく合っているように思える。

と、余計なことはさておき、

「なるほどね。……ってことは、あの二人の仲裁役は俺か」

帰還後、初の業務だというのに、一発目にこれをしなければいけないのは骨が折れる。本当に。もう呆れを通り越して脱力感さえ覚える。

だが、ここでなんとかしないと仕事どころの話じゃなくなってしまう。

それだけを頼りに、俺は仕方ないと言わんばかりに重い足を班長のもとへと向ける。すると、なぜか後ろで控えていたライラが一緒についてきた。

あとで紹介でもしておくかと考えつつ、問題の二人が目の前に迫る。そこで俺の存在に気がついたのか、ロイは情けない声で「……ふ、副班長……」と声を漏らした。

次の瞬間、彼の言葉につられてかエリーザも「ああ？」と不機嫌そうな声を出しながら、こちらに視線を向けた。

「班長。ジルエード・ヒルビアンカ、只今、出張から帰還いたしました」

め、目が怖いですよ？ エリーザ班長！

と内心で思いつつ、俺は初めに当たりさわりのない挨拶から切り出す。さわやかな笑顔付きで。

すうっと彼女はワインレッドの瞳を細める。その眼光に鋭さが増す。やや引きつり気味の笑顔で、エリーザの返答を待つこと数秒。

「ああ。遠出の依頼、ご苦労だった。ジルエード。あとで
報告書にしてくれ、という部分が消えた。かわりに、その視線は俺の後ろに控える人物に向けられていた。

さきほどまでの鋭さは微塵も無い。むしろ、後ろにいる彼女の存在に驚いているようにも思える。

しかも何を思ったのか、掴んでいたロイの胸倉を唐突に離れた。瞬間、宙づり状態にされていた彼が、鈍い音をたてて床に落ちた。

そんなことを気にすることなく、エリーザはふてぶてしい笑みと白い歯を見せる。

どうやら彼女は、後ろにいるライラに興味を持ったらしい。彼女は、自分が興味を持ったものにしか手を出さない癖がある。そのせいか、うちが引き受ける依頼のほとんどが、オカルトめいたものになっったりする。

「おや、少し変わったお客さんがいるじゃないか。何かの依頼か？
それとも、何かそういう命めいがあるのか？ え？ ジルエード・ヒルビアンカ」

と、エリーザは嬉々として問いかける。

どうも班長は一目見ただけで、ライラの種族を理解したらしい。そういう勘めいた所は相変わらず鋭い。そのため、あまり気が抜けない相手なのは確かだ。

「班長、そろそろフルネームで言うの、やめてもらえませんか？」
前々から違和感を覚えるんですけど、と訴えたら、楽しげに笑われた。

それに対して俺は無言で非難の眼差しを向ければ、彼女は「あー、すまんすまん」と平謝りをされる。これも、彼女の性格なため致し方ない。

そしてそのまま、エリーザはドサツと自分の執務用の椅子に腰を落ち着ける。

「お前がそう言うなら、まあ考えなくもない。呼び方なんぞ、人それぞれなんだがね。それに、お前の名前は語呂がいい。私のお気に入りの名前、ナンバーワンだ」

「いやいや、自分で言うのもなんですけど、この名前、あまり語呂は良くないですよ？ 微妙に覚えにくいし」

「だが、私の心にはグツときたぞ？ しかも、奥底まで突き刺さっている」

「グツとくるもんでもないんですけどねえ！ っていつか、名前なんて突き刺さるもんでもないでしょうがっ！」

「それよりも、早くその精霊ソウルを紹介してくれないか？ 彼女とお前が、どういう関係か気になっているんだ」

まあ、大方予想はついているがね、とぼやきつつエリーザはそう話を振る。直後、机の引き出しから煙草を一本取り出し、それに火をつける。さきほどの好奇心めいた眼差しはきれいに消えている。

切り替え早くないか？ おい！

というツツコミを言うに言えなくなった俺は、深く呼吸をしてズシた思考を切り替えた。

彼女が吐き出した紫煙を盛大に吸いこんでしまったが、特に気にすることはない。が、ライラの方は嗅ぎ慣れない匂いに、やや顔を

顰めている。

「察しの通り、彼女の種族は精霊。名前はライラと言って、今は俺の付き人。もとい、俺を守護者する役割を担っています」

ライラに関して大まかなことを口にする。と、エリーザはその間に吸った煙草の煙を吐き出した。

「なるほどね。精霊は、自分に名を与えた者を守護する命にある、か。それはそれで、面倒な人生を歩むことになるんだね。まあ、彼女と主従の契約を交わしたのなら、うちとしても、なんら問題はあるまい」

そう言うなり、エリーザは吸っていた煙草の火を灰皿でもみ消すと、隣にいるライラの方へ視線を向ける。

「そういうことだから、キミも同じようにジルエードと共にここで働くといい。我々、第一班に属するメンバーは、キミを歓迎する」

「……はい。よろしくお願いします……」

小さく頭を下げた答えをライラに、エリーザは「期待しているよ」そう声をかける。と同時に、彼女は鋭さを帯びた表情で再び俺を視線で捉える。

「さて、ジルエード。改めて、長期にわたる遠方の依頼、ご苦労だった。昨夜、その依頼主から電話があつてね。酷く感謝していたよ。キミが来てくれてよかった、また何かあればキミに頼む、そう言っていたよ。それで、報酬は後日、うちにお前宛てで送られることになったている。……とまあそのことも含めて、事件発生から解決までの流れを軽くでいいから、まとめといてくれ」

「了解。それじゃあ、これは昼までに仕上げれば？」

「ああ」

そう頷かれながらも、エリーザから報告書を受け取った俺は、ライラと共に自分の持ち場に戻る。直後、俺の背後では再びエリーザに名を呼ばれたロイが、情けない声をあげた。

どうやら、まだあの場にへたり込んでいたらしい。

その後も、しばらくロイがエリーザにいじられていたのは周知の

事実である。

まあ結果としては、三ヶ月分の給料を半分に減らされたあげく残業手当もつかない、ということとで幕を閉じた。

「……本当に、災難なやつだよな。ロイは」
という俺のつぶやきに、エリーザと彼を除いた同班のメンバーは一斉に頷いたのである。

それからというもの、第一班の部屋は比較的穏やかであった。というのも、特にこれといった仕事がないらしく、班員は俺とライラを含めて五人いるのだが、その半分が個々の趣味を嗜好していた。仕事に手をつけているといれば、班長のエリーザと副班長の俺くらいだ。といっても、書類確認やら必要事項の記入と捺印するだけだが。

その最後に、遠方の依頼についての報告書を書き終えた俺は、ペンを机の上に置き大きく伸びをした。

体の筋と関節が盛大に悲鳴を上げる。

机の端にある置時計を見ると、もうすぐ正午を迎える所であった。「はい、お義父さん。お疲れ様」

俺の作業終了を見計らってか、娘の二ナが淹れたたのコーヒーを置いてくれた。

「コーヒー独特の香りが、張りつめた精神を落ち着かせてくれる。

「ありがとう、二ナ」

とお礼を言い、目の前に置かれたコーヒーを飲む。

その後、俺は彼女の頬を優しく撫でる。すると、彼女は気持ちよさげに目を細めて「こっちこそありがとう、お義父さん」と言葉を返した。しかも、ゴロゴロと喉を鳴らす。その背後にある尻尾も大きく左右に揺れる。

はたから見れば和む光景なのだが、そこにエリーザの声が割って入った。

「……ジルエード、ここは一応職場だ。そういうことは、ここ以外の場所で頼もう。あと、書類整理と報告書が出来あがったんなら、早く持ってきてくれ」

こっちも、事務的なものは早く片づけたいんでね、と俺達の行為に注意した挙句、書類を寄せせという催促までされる。

彼女の言葉に「了解」と返事をしつつ、俺は机の上にある書類の束を持ってエリーザの元へ向かう。その際、残念そうな顔をする二ナを慰めるように、その頭を軽く撫でてやった。

「はい、班長」

エリーザの望み通り出来あがった書類の束を渡せば、当の本人は「ああ、ご苦労」と言葉を返した。

次いで、俺と同じように机の端にある置時計に目を向け、もう昼か、などとぼやく。と同時に、受け取った書類を机の上に置いて、さっと立ち上がる。

「さて、ジルエード。少し、昼飯に付き合え。もちろん、私のおごりだ。遠慮はいらんぞ」

などと言いながら立ち上がり、一人でさっさと部屋の入口まで移動する。その途中で、橙色のロングコートを羽織り、二ナとライラにも誘いを入れる。

「……は？ 昼飯って、班長、食堂でしょ？」

と当たり前のことを聞けば、やや不機嫌そうに彼女は振り返る。そして、

「今日は、外に食いに行く。たまには食堂の味より、外の味の方が恋しくなるぞ」

早く準備しないと置いてくぞ、と言いながらエリーザは扉を開け、さっさと室外に出て行った。

はあ。なんか、先が思いやられる。

そう思いながらも、俺は扉の近くに掛けてある自分のコートを羽織る。と同時に、俺の執務机の傍らにいたライラが、ささっと傍に寄ってきた。

とりあえず、彼女は俺についてくるらしい。あとは、

「ニナは、どうする？」

そう聞くと、ニナは遠慮しがちに首を左右に振る。

「ううん。わたしは、外に出るの苦手だから食堂で食べる。お義父さんは、エリーザさんと一緒に行ってきてあげて」

エリーザと食事に出かける間、ニナの面倒を同じ班員の獣人族ビーツマンに頼み、第一班の部屋を後にした。

「……さて、班長はっつと」

扉を閉めたあと、そこで待っているであろう彼女を探す。が、どうもその姿が見当たらず、思わず眉間にしわを寄せてしまう。

どこに行ったんだ？ 班長は。

と疑問に思いつつ、階段の方に歩を進めようとした時、クツとライラに腕を引っ張られた。

「ん？ どうした？」

「マスター。エリーザさんは、あちらの部屋に」

その問いかけに返答したライラは、俺の腕に自身の片腕を絡めながら奥にある部屋の一つを指さす。

彼女が示した部屋は、書類の点検や確認をしている第四班のころだった。

「そこに、班長がいるの？」

なぜ、エリーザのいる場所が分かるんだろう？

と、彼女の動作と発言に不思議に思いつつも、ライラが指さした部屋へ進路を変更しようとした体の向きを変える。

その時、俺達が目指そうとした部屋の扉が開き、そこからエリーザと第四班の班長が出て来た。

「それじゃ、また後で書類を持ってくるから。よろしく頼む」

「はい。エリーザ班長の方も、お仕事がんばってくださいね」

「ああ。といっても、今はうちの班に仕事らしい仕事はないのだがね」

「あら。出かける支度をなさっているから、てっきり、聞き込みにも行くのかと思ってましたわ」

「いいや。今日は、久しぶりに外食でもしようと思ってね」

「そうでしたか。あまり、班員にもご迷惑をおかけしないようにね」

「ふんっ、迷惑は余計だよ」

そのあと二人は軽く談笑をしたあと、第四班の班長は部屋に戻った。

静けさが廊下に訪れたあと、一息ついたエリーザがこちらへ歩きだした。その時、俺達の視線に気がついたのか、どこか嬉しそうに白い歯を見せて笑みを作る。

「おや。もう少し時間がかかると思ったが、意外と早いじゃないか。その様子だと、ライラに私の居場所を教えてもらったようだな」

俺達に歩み寄るなり、エリーザはそんな言葉を投げかけた。

「人を勝手にのんびり屋にしないで下さいよ、班長」

「それもそうだな。……で、後者の方はどうなんだ？ さっき私が言ったことは、あながち間違っではないだろうか？ それに、彼女が私の居場所をあてたことも気になるんじゃないのか？」

と、片方の眉をあげてエリーザはそんなことを聞いてくる。

「……確かに、気になるのは気になります。俺も、精霊ソールについて全て知っているわけじゃないですから」

精霊は、全体の種族の割合が一割ていどしかない。そのためか、他種族と違って生態や繁殖などの情報が不明な部分が多い。

俺も、存在や主従の契約くらいの知識しか持ち合わせていない。「そのようだね。まあ、ここで話すのもなんだから、歩きながらしようか」

腹も減るだけだし、と言うなり、エリーザは俺達に背を向けて歩き始めた。

もともと、私達精霊は、人間や獣人族ビージャン、長寿で聖なる者として代表的なエルフとは少々違ってね。といっても、肉体的構造は他種族のそれとほぼ同一のものだがね。だから普通に、胎内に子を身籠り産むことだってできる。

私が言うのは、肉体に宿る魂　精神面と我々精霊がどうやって生れるかという方面さ。

最初は、精神面の方から話そうか。

まず、第六感　まあ、ここでは直感や靈感に値するが、精霊はね、それがかなり色濃く備わっているんだ。時折、物や人に憑く霊が見えたり、吉凶の予言めいたものができたりする。

それに、風・火・水・光・闇・土・植物にも、私達精霊に近い力を持つ者がいてね。私は、それを『小妖精ピクシー』と呼んでいるんだが、私達は彼らの姿を見たり話したりすることができるのさ。……ああ、さすがに触れることはできないがね。

それとね、私達は彼ら小妖精の恩恵を強く受けているんだ。どの力を最も受けたかは、髪や瞳の色を見るといい。すぐにわかる。

……ん？ ああ。見ての通り、私は火の加護を強く受けていてね。一応、他の小妖精とも見たり話したりできるさ。けどね、直接的に力を貸してくれるのは、やはり火の小妖精に限るな。その加護を強く受けているから。

まあ、精霊の精神面についてはこのくらいだな。

さて、あとは……そうそう、精霊がどうやって生れるか、だったな。

これは初めにも言ったと思うが、私達精霊の肉体的構造は、他の種族とほぼ同一のものでね。女性であれば、普通に胎内に子を身ごもり、産むことだってできる。そうになると、両親のどちらかが持つ小妖精の恩恵を受け継ぐことになるがね。

もう一つは、同一の小妖精たちが集まった時。それぞれが発する気が一定量を超すと、稀に精霊が誕生することもある。だがね、その大半は、ハリケーンや大火災なんかの自然災害を引き起こす、トリガーになるがね。

まあ、これは私が今まで生きてきた中で、片手で数えるほどしかないな。って、こんなところで、私の年齢を聞く奴があるかつ。だが、先代のギルド長より年上だ、ということは言っておこう。それ以上は、私のことについては詮索するなよ？

ふむ、わかればいいんだ。相変わらず、お前は察しがいいな。人間の寿命で人生を終えるには惜しい存在だ。

……お、ここだ。なんだ、ジルエード。その微妙な表情は。私にもね、お前と同じで鼻^{ひいき}屑^{せき}にしている店や人物というのはいるんだ。

もちろん、いい意味の方だな。

ほら、いい加減覚悟を決めろ。

『いじつしゃいー』

その店に入ると同時に、渋い男性の声が入り響いた。次いで、「お、エリーザ。今日は連れも一緒かい？」

と、カウンター越しに声をかけて来たのは、精悍な顔つきで男らしい筋肉質な体つきをした男性である。彼の名は、ロージア。種族はエルフで、この店で飲食店を経営している。

俺としては、あまり訪れたくない店である。というのも、ただ単に彼が苦手というだけなんだが。

しかし、料理の腕前は良く、彼の料理目当てにした常連が少しずつ増えている。その中に、俺やエリーザも含まれる訳だが。

「ああ。今日、新しくうちの班に来た新人がいてね。ついでだから、お前にも紹介しておこうと思ってね」

そう言いながらも、エリーザは歩を進めてロージアの前まで行く。そして、カウンターの下にある椅子を引き出して座る。

俺も彼女に倣ってその隣に腰を落ち着けると、ロージアの大きな手が頭の上に乗せられた。

「で。お前は、ずいぶん久しぶりだな、おい。元気にしてたか？ ジル坊よ！」

と、どこか嬉しさを含んだ声で彼は言い、俺の頭を掻き混ぜるように撫でる。

御歳百二十のくせに未だに元気すぎるせいで、撫でられる頭が地味に痛い。

「ロージアさん。あんたもいい加減、その呼び方は止めてもらえませんか？」

「いいや、だめだ。お前は、この中で一番若いんだから。止めて欲しけりゃ、俺より歳が上か、俺を超える料理を作ってみることだな。それまでは、呼び方は変えんぞ？」

ジル坊「
今度は軽く頭を叩きつつもそんな事を言われた。」

確かに。この中じゃかなり若いけど、なんか悔しい。

そう思っていると、おずおずといった感じで隣に座る気配があった。途端に、ロージアの行為が止まり、さらには口笛を吹く音まで

聞いえてくる。

「これは珍しい。精霊ソウルのお譲ちゃんかい。エリーザ、彼女をどこで見つけたんだ？」

どこか興奮した様子でロージアは言い、不思議そうにエリーザの方に視線を向ける。

その問いに彼女はライラを一瞥すると、仕方ないと言わんばかりに口を開いた。

「南部のスラム街だそうだ。彼女を連れて来たのは先代だよ。いきなりギルドに戻って来たかと思えば、私を執務室に呼び出しては彼女の紹介を受けたんだ」

「南部のスラム……ねえ。最近、あんまりいい噂は聞かんかね。

……ところで、エリーザ。……その、しばらく彼女を貸してくれねえか？ ほんの一週間くらいでいいんだ」

最近、客の足が遠のいててさ、と言いながら、ロージアは両手をカウンターにつけて頭を下げる。

「だが、私の独断ではどうこう出来ん。そういう相談は、彼らに聞いてくれ。一応、彼女はジルドのガーディアンソウル守護精霊だからな」

遠慮もなしに、エリーザはきっぱりと彼に断りを入れる。しかも後半には、少し聞き慣れない単語があったが。

と。その前に、カウンター越しにいるロージアの視線が怖い。つていうか、俺とライラが契約してて何が悪い。てか、それ一応、ギルド長命令も半分含まれてるから！

そう実際には口にはできず心の内で毒づく。

「おい、ジル坊。それは本当か？」

しかも、さつきより声のトーンも低くなってるし！

「……う、うん。まあ、成り行きでそうだった。とりあえず、ライラも俺に懐いてくれてるし」

な、と隣に座るライラに同意を求め、彼女に視線を向ける。と、

ライラは俺にコクンと頷き、自分の腕を俺のそれに絡めてロージアを見る。

まだこの環境に慣れていないせいか、あまり話そうとはしない。だが、彼女は彼女なりに、自分と俺はこういう関係だ、と無言で主張していた。

それを目の当たりにしたロージアは、仕方ない、と言わんばかりにため息を吐く。

「分かった。その娘は、あきらめるよ」

「良かった。それじゃあ……」

「その代わり、お前んとこの二ナを貸せ！」

彼の言葉に安心した矢先に、ロージアは俺の言葉を聞きもしないで声を発した。

「つて、なんでそこで俺の娘が出てくるっ！」

「それは秘密だっ。貸してくれ！ 生活がかかってるんだ！」

「何が秘密だよ」

というやり取りを、このあと数分間行った。が、それでも結果が出ないでいた。それを見かねてか いや、それよりも空腹の方が勝ってきたのか、エリーザが俺達の間割って入って来る。

「おい、もうその辺にしておけ。いい加減、私も腹が減ってきた。

今日は、そういう相談を受けにきたわけでもないぞ」

「だ、だがなあ、エリーザ」

どうしても納得いかないのか、そんな声をあげる。

「そんなにボランティアが欲しければ、うちのギルドに依頼を回してくれ。私たちも、ただで働かされるのはごめんなんですね。一応、私たちにも生活がある。それに当てる費用がなければ、我々は生きていけないからな」

エリーザの言うことはもっともだ。ここで一週間もボランティアでただ働きすれば、その分だけ給料を減らすことになる。有給休暇があれば別だが、あいにくうちのギルドにはその制度を取り入れていない。実際に、それを使う者が出てこないからだ。

それは当の本人も十分理解しているのか、苦虫を噛みつぶしたような表情をしている。そして、しばらく逡巡したあと、はあっと息を吐いた。

「……わかったよ、エリーザ。そいつは悪かった。とりあえず、今から飯作るから、もう少しだけ我慢してくれ」

そう気を取り直した様子で言い、ロージアは奥にある厨房に姿を消した。それを見計らって、俺はエリーザに小声で話しかける。

「班長、本当にそれでいいんですか？」

「別に構わんよ。交友関係とはね、時には突き放すことも必要なんだ。特に、長く生きる私にとってはね。それに、たまには外に出て小妖精ピクシーどもの情報も仕入れたいしね」

と、エリーザは答えつつ、目の前にあるガラス製のコップを取る。そして、水の入ったポットを片手にグラスの中に透明な液体を入れる。それをあと二回ほど行い、俺とライラにも配ってくれる。

「小妖精の情報、ですか。それ、役に立つんですか？」

それにお礼を言いつつも、俺は疑問に思った事を口にする。と、何を思ったのか、エリーザは軽く鼻で笑った。

「ああ。事件が起きる数日前とか、その直前や最中まなかは特に、だな。彼らは、環境の変化や異常を察知するのに長けている。その上、仲間内での情報伝達も早いんだ。ある程度の情報の広がりには個人差はあれどね」

と軽く説明したあと、エリーザはグラスに入った水を一息で飲む。その数分後、ロージアは作りたての三人分の料理を持ってきてくれた。

久しぶりに味わう彼の食事は、いつも以上に美味しく感じたのは確かである。

だが、食事の途中から終わるまで、エリーザは難しい顔をしていった。

ロージアの店で食事を終えた俺達は、ゆっくりと路地裏を歩いていた。そこは、彼の店に行く時に使った道とは、まるっきり違うものである。

背後には一定距離を保って尾行をする人の気配が複数あった。

初め、それに気がついたのはエリーザだった。彼女は店を出るなり、少し寄るところがあると言い、この路地に入ったのである。

そんな俺も彼女と共に歩き出すと同時に、不審な気配というかそういう類の気配に気がついた。それからは、何も口を出さず彼女の言葉に従っている。

薄暗い路地を歩くこと数分。先導をきるエリーザが差し掛かった十字路を右に曲がると走り出した。

俺とライラも、彼女と同じようにして後を追う。と、数メートル先の建物の中に入る彼女を見た。すぐさま俺達もそうすると、手早いかつ静かに扉が閉められた。そして少しの間、息を潜めていると、二人分くらいの足音が俺達のいる建物の前を通り過ぎて行った。

後続の尾行者がいらないか、その場で息を殺して様子を伺っていた。それ以降、足音がないことを確認すると、俺は目を閉じてゆっくりと息を吐いた。

どうやら、上手く撒けたようだ。

そう安堵すると同時に、柔らかい光が目の前で広がる。慌てて目を開くと、掌の上に赤い火の玉を浮かせたエリーザがいた。彼女は無言のまま、俺の斜め後ろを空いた方の手で指さした。

その方向を辿ると、二階へ続く階段があった。少々老朽化が進んでいるが、それを使って上にあがれ、と彼女は示している。

二階へ上がると、埃っぽい臭いと籠ったようなそれが一層強くな
った。その一番奥にある部屋に俺達はいる。

外はお昼時を迎えて明るいのが、唯一、日の光が入る窓を暗い色の
カーテンで閉め切っている。そのため、決して周囲が見えやすいと
は言えない。

階段を上がる途中、躓いたらどうしよう、などと考えていたが、
エリーザの持つ火があるおかげで、その心配はなかった。

「……さて。ここなら口を聞いても、なんら問題だろう」

一本の蝋燭に火を点したエリーザは、それを丸テーブルに置くと
そう口にした。

「それじゃあ、俺から一つ。さっきの連中は、何なんですか？ 怪
しい気配でしたが」

ライラと顔を見合わせた後、俺は先ほどから気になっていたこと
を聞いてみる。

「率直に言うが、うちの班に依頼だ。聞いて驚くな。その依頼主は、
ムーベル邸の長子だ。依頼内容は、父　トラバイト・ムーベルの
死の解明と事件解決、だそうだ。しかも依頼の際、犯人側に彼を目
撃されていたようだね」

おかげでこの始末さ、とエリーザは腕を組むと不服そうに告げた。
トラバイト・ムーベル。その名は、俺でも知っている。確か二代
前の当主が、商業一の町と謳われるこのリーリアで大成功を収めた
人だ。それが現代にまで続き、着々とその力を蓄えている。

その彼が死んだ　いや、殺されたと言ったほうがいいのか。
「けど、そのこと……」

どうやって知ったんですか、と聞く途中で、ふとエリーザが言っ
ていた言葉を思い出した。それは俺が彼女に、小妖精ピクシーの持つ情報な
んで役に立つのか、と問いかけた時だ。

『事件が起きる数日前とか、その直前や最中さなかは特に、だな。彼らは、

環境の変化や異常を察知するのに長けている。その上、仲間内での情報伝達も早いんだ」

確か、エリーザはそう言っていたはずだ。そんな俺の思考を読んだかのように、エリーザは、またもや口を開いた。

「半分正解だな。今回は妹のエリーの方だよ。彼女側につく小妖精が血相を変えて飛んで来たんで、何事かと思えば、その内容でね。レイスンが話を聞く限り、その犯人は複数で、今も町に潜んでいるというじゃないか。向こうさんも、こんなに手早く動いてくるとは、少し計算外だったかね」

案外、うちのギルドに内通者でもいるかもしれんな、とそうであつて欲しくない事まで、さらりと言つてくれる。その後、自身が着るコートの内側から煙草を取り出すと、その先端を蠟燭の火に近づける。

「つてことは、小一時間はここで待機つて事ですか？」

「そうなるな。一応、うちの班は、わたしの代わりにエリーが指揮してくれるそうだから、なんとかかなりそうだがね」

今さらだが、すごく二ナが心配になつてきた。

あの娘にだけは、危険な目に合わせたくない。

「大丈夫だ。エリーには、二ナを捜査に参加させるなど言つてある。心配するな、と言つても無駄だろうな。おそらく、彼女もお前の身を案じているだろうな」

こうなつたら、早く帰るにつきるな、とエリーザは紫煙を吐き出しながらばやいた。

お義父じつとさんがライラを連れて、エリーザ班長とお食事に行っている間。

さっきまでお義父さんが座っていた執務用の椅子に座って、私は机の上を綺麗にし始めた。

捺印に使用する印鑑を、きちんと専用のケースに入れて引き出しに戻したり。黒インクのペンをペン立てに直したりと、お義父さんが帰ってきた時に気持ち良く使えるようにしておこうと思ったのだ。エリーザ班長が外にお食事に行く時は、決まってロージアさんのお店で食べることが常だ。お義父さんが遠方に出張でない時に、その代わりに何度か連れて行ってくれたけど、二回目からどうも二の足を踏んでしまう。

確かに、エリーザ班長が言うようにロージアさんが作ってくれる料理はおいしい。だけど、その人柄と言うかその人の性格が、私には合わなかった。

最初は、外に出る機会もあまりなかったから、正直、かなり緊張していたのである。

そこに、彼の元気の良さそうな性格が重なったため、ロージアさんの第一印象は「苦手」の二文字がついてしまったのだ。

一通り机の上を綺麗に片し終えた私は、そろそろ食堂に行こうと立ち上がる。

それと同時に、向かいの席に座っていた同族の男性が立ちあがった。

お義父がエリーザ班長と出かける前に、私の面倒を見てくれるように頼んだ人である。

「二ナちゃん、昼飯かい？」

と、親しげな口調で話しかけて来た彼は黄色い毛並みを持つトラ
の獣人族である。名前は確か、イーグ・ラウベンだ。

初めて彼を見た時は少し怖い印象があったけど、少しずつ言葉を
交わしていくうちにその印象は薄れている。それに背も大きくて体
つきもしっかりしているから、いざという時に頼りがいのある人物
でもある。

「はい。私もそろそろお腹が空いてきたので、食堂に行こうかと思
います」

「そうか。なら、俺も同行しよう」

「ありがとうございます」

「構わんよ」

柔らかい笑みを浮かべて私が答えると、イーグさんはそう言って
歩き始めた。私も彼のあとについて行く。

食堂に行くと、珍しいことにギルド長のレイスンさんとその秘書
のエリーさんがいた。

あ、エリーさん達だ。

そう思いながら、やや駆け足気味に彼女の方に駆け寄った。やや
遅れてイーグさんも私の後についてくる。

「エリーさん。こんにちは」

「あら。ニナちゃん。こんにちは。今からお昼？」

彼女たちの元に駆け寄った私は、早速エリーさんに声をかける。

すると彼女は私に気がついたのか、にこやかな笑みを浮かべてそう
言葉を返してくれる。

「はい、そうです」

「そうなんだ。……あら？ 今日、ジルエード副班長とは、一緒
じゃないの？」

私の言葉に相槌を打つと、うしろに立つイーグさんを見てエリー
さんは不思議そうに問いかけた。

彼女の向かいの席では、満面の笑みで私に話しかけてくれるのを待つレイスンさんがいた。だけど私はあえて無視した。一応、お義父さんに、レイスンさんとあまり関わりを持つな、と言われている。「お義父さんは今、ライラを連れてエリーザ班長とお食事に出かけてるんです。多分、ロージアさんのお店だと思っんですけど」

お義父さんと一緒じゃないことを残念に思いつつ、私がそう口にするのを待ちきれないと言わんばかりにレイスンの空咳が聞こえた。私達が彼に視線を向けると、なぜか得意げな表情をしてみせた。しかも、片方の手を胸元に当てて。

「久しぶりだね、ニナちゃん。このわたしが最高の笑みをみせてあげているのに、気がつかないとは何事だい？」

その言葉にゾクツとしたものが背筋を走り、思わず私は二、三歩身を引いた。と同時に、彼の言葉を偶然聞いてしまった周りのギルド員は、そそくさとその場から離れていった。

なんとかかしようにも、彼のあらしい方を知らないため、どうしようもない。

助けを求めようと、エリーさんやイーグさんに顔を向ける。が、エリーさんは呆れた表情で額に手を当て、イーグさんは「これはもう手遅れだ」というように首を横に振っている。

多分、ここにお義父さんやエリーザ班長がいれば、何か言葉を掛けていそうだ。しかし、今はそれを望めそうにない。

どう彼とコミュニケーションを取ろうか悩んでいると、レイスンさんの方から口を開いてくれた。

「なんだい？ その引きつぷりはっ。わたしの言葉に、そのような言葉はなかったと思うが？」

あ、なるほど。無自覚ですか。かなり重傷ですね。これは。私だけではなくエリーさんもイーグさんも、そう思ったに違いない。

と、その時、慌てた様子で食堂に掛け込む三十代くらいの女性がいた。受付嬢だ。彼女は周囲を見渡し、私達の方で目を止めると駆

け寄ってきた。

その様子を目にしたレイスンさんは、ふざけたけたような表情を消し、代わりに仕事の時に見せる真剣なそれに変える。

「どうしたんだい？」

「何かあったのですか？」

レイスンさんとエリーさんが、そう聞くのはほぼ同時だった。

「ギルド長、大変です！ あのトラバイト・ムーベル氏が、何者かに殺害されたようですっ！ 依頼主は、彼の長子。内容は、その死の解明と事件解決だそうですっ！ 依頼主を受付で待たせているので、対応をお願いします！」

その言葉を聞いて、私は不意に胸の鼓動が速くなるのを感じる。嫌な予感と言うべきなのか。変な汗が出てくる。

「わかった、すぐに向かう」

レイスは彼女の言葉に頷くと、すぐに受付のあるギルドの入口の方へ走って行った。

秘書のエリーさんも、そのあとに続こうとした時、不安げな表情をする受付嬢が呼び止める。

「……あの、エリーさん」

「何でしょうか？」

「依頼主の付き人が言っていた事なのですが。どうやら彼らがこちらに来る途中、何者かにつけられていたようなのです。もしかすると、外出中のエリーザさんやジルエードさん、それに例の精霊ソールの娘ニコも、狙われている可能性が」

その言葉に、私の心臓がもう一度大きく脈打った。その音が、耳元でうるさいくらいに響く。

お義父さんが、危ない……。

助けに行こうと思うが、犯人が周囲をうろついているという恐怖からか、体が上手く動いてくれない。私は、そんな自分を自分で抱き締めて顔を俯かせる。

お義父さん。どうか、無事に帰ってきて……。

今の私には、そう願うしかなかった。

この家に立て籠つて、一時間くらいが経った頃。

エリーザは紫煙を吐き、火のついた煙草をくすみがかった灰皿で揉み消した。そして、彼女は座っていた椅子から静かに立ち上がる。「さて。そろそろ一時間だな」

そう言うなり、エリーザは未だに爛々と燃える蠟燭の火に視線を向ける。一見、ただその火に見入っているようにみえる。だが、彼女曰くそれは「火属性の小妖精ピクシーと会話をしているだけだ」と言う。

彼女の話によれば、小妖精はそれぞれ、風・火・水・光・闇・土・植物の七種類の属性に分かれているそうだ。そして、彼らが良く集まる場所というのが、それぞれの属性に該当する物か何かになる。

例えば、火がある所には火の小妖精が、水辺には水の小妖精が集まる。というように、今、エリーザの眼下にある蠟燭の火の周りには、火を司る小妖精がいるのだろう。と同時に、その火の光が届かない暗がりには、闇を司る小妖精も存在するだろう。

そんな中、彼女と小妖精の対話を、俺とライラはベッドの脇に腰かけて見守っていた。ライラはというと、俺と腕を絡ませて体を密着させて大人しくしている。

彼女としては、俺と引つ付いている方が落ち着くようだ。しかし、その行為を行うのは、自身が気を許した相手がいる時か、俺以外に誰もいない時に限ってである。

逆に、そこに面識のない人がいれば、彼女は俺の傍で見守るくらいに留まる。現に、第一班の部屋にいる時や食堂などの場所ではそうだ。

「なあ、ライラ」

横で密着するライラに顔を向けた俺は、そつと声をかける。する

と、彼女は俺を上目遣いに見る。

「何でしょうか？」

「ライラも、小妖精が見えるのか？」

俺は空いた方の手で彼女の頭に手を置き、絹糸のような銀髪を梳くように撫でる。

さらさらしていて、触り心地が良かった。

「はい。この部屋には、二属性の小妖精がいます」

そう答えると、自身の膝上とエリーザの方に視線を向ける。

おそらく彼女が見る先には、小妖精の姿が映っているのだろう。

「それって、火と闇の？」

「はい。火の小妖精は、エリーザさんの周りや蝋燭の火に。闇の小妖精は、私の肩や膝上、それと部屋の暗い部分にいます」

マスターの周りにも、火と闇の小妖精が集まっています、と言われた。

彼女の言葉に訝しく思ったが、それを俺は確かめることは出来ない。と同時に、少し不安に思った。

精霊ソウルでもない人間に、小妖精がついても大丈夫なのだろうか？

「ジルエード。その疑問については、全く心配しなくていいぞ」

と、ふと思つた俺の疑問に、火属性の小妖精と会話していたはずのエリーザが答えた。

どうやら、小妖精との話は終わったらしい。

「どういうことですか？」

「どうもこうもないさ。過去　　気まぐれに人や獣人ビトジャン族やエルフにつく小妖精がいたんだ。そういう奴に限って、普通より第六感に優れている場合が多くてね。今はだいぶ、少なくなってきたのは事実だが。まあ、キミにつく火の小妖精は、私と良く付き合っている礼ととつてくれていい。闇の方は、言わずとも分かるな？」

「ライラのマスター、だからですか？」

「ご名答だ、ジルエード。……さて、そろそろギルドに戻ろう。これ以上、ここにいと危険が多すぎる」

わたしも早めに戻って、捜査の指揮を交代しなくてはね、と言いながら彼女は蠟燭の火に息を吹きかけた。

暗闇が辺りを覆う。それも束の間。今度は、エリーザの手の上で拳くらしいの火の玉が浮き、周囲を優しく照らす。

「確かに。その意見には同感です」

ライラと共に立ち上がった俺は、そう静かに述べる。

帰りは特に『誰か』につけられることもなく、無事に ^{ミーア} 幸福ギルドへ戻ることができた。季節が季節だけに、外は厳しい寒さだったが。

それに気がついた受付嬢は駆け寄り、「怪我はしていませんか？」とか「怪しい人につけられませんでしたか？」などと声をかけてくれていた。

エリーザは一言「大丈夫だ」と返事をしながら足を進め、二階へ続く階段を上がっていく。それでも、まだ不安げな表情をする受付嬢に、俺も「本当に大丈夫だよ」と声をかけて、エリーザの跡を追いかけた。

階段を上り切り、少し廊下を歩いてエリーザと一緒に第一班に宛がわれた部屋に入る。と同時に、部屋に待機していた二人のメンバーとエリーザが一斉にこちらを向いた。

昼食に出かける前より人が少ないのは、エリーザから聞いた事件の聞き込みに向かうメンバーがいるからだろう。

「遅くなって悪い。相手を撒くのに手間取ってね」

と、エリーザは落ち着いた声音と表情で言い、橙のコートを脱ぐとそのまま自分の執務机の方で指揮をするエリーザの方に歩み寄っていく。

その間に、娘の二ナはコートを脱いだ俺に駆け寄る。と同時に、俺に飛びつきギユウツと俺を抱き締めた。

「お義父さん、ライラ。大丈夫？ 怪我とかしてない？ 気分が悪

いとかもない？」

すぐに彼女を抱きしめ返すと二ナが顔を上げ、俺とライラを交互に見ながら心底心配そうに問いかけて来た。

「心配してくれて、ありがとう。二ナ。俺達は大丈夫。怪我とかはしてないから」

そんな娘の頭を何度も撫でてやりながら答え、同意を求めるように、隣にいるライラに視線を向ける。それにつられて彼女を見やっ
た二ナに、ライラは「本当に、大丈夫ですよ」と答えてくれた。

その言葉でようやく安心したのか、二ナは安堵の表情を見せながら再度、俺を抱き締める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1915t/>

ソール 幸福 ギルド目録

2011年11月9日03時15分発行